博士論文要旨

論文題名：唐代傳奇小説研究
――虚構・細部描寫・類話群の關係に基づいて

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
トウ　ギョク
TANG　Yu

本論文は、立命館大學文學研究科博士後期課程の學位請求論文として提出するものであり、すでに公刊した論文二篇・未公刊の論文一篇の三部分によって構成されている。

第一章「唐代傳奇小説の中の類話群――細部描寫による虚構の一つの體現として」は、『學林』第七十一號（中國藝文研究會、二〇二〇年）に公刊した論文に修正を加えたものである。近年の先行研究によって、唐代傳奇小説の多くは宴會上で作られたということが明らかにされた。宴會の雰圍氣を盛り上げるために、また、自分の文才をアピールするために、傳奇小説の作者は往々にして話の眞實性を重視せず、文學性を重んじた。細部描寫は文學性を表すのに有效な方法であるため、唐代傳奇小説の中に大量に現れた。これらの細部描寫は、必ずしも事實ではない。そして、宴會上で時には奇異な話をしなければならない場合があり、奇異な體驗がなかった參會者は、ほかのところから聞いた話を、主人公の名前や出來事の發生時間と場所などの細部の設定を改め、自分の經驗として皆に聽かせた。細部の設定が改められた時、話は事實から虚構に變わった。原話と細部の設定を改められて語られた話の兩方が記錄され、現在では「類話群」という現象と認識されている。本章では、「張李二公」の類話群を例として、細部描寫による各作者の虚構の狀況を分析した。まず、この類話群の各作品が先行作品に對して行った改作に視點を當て、この類話群のストーリーの流轉を明らかにした。そして、その改作が各作者の創作目的を表すということから、作者たちが意識的虚構をなしたことを推論した。最後に、「列士池」の類話群の「顧玄績」の最後にある作者の段成式の記述をもって、唐代傳奇小説の作者がすでに小説は虚構のものだと意識していたと證明した。

第二章「先行作品の要素の組み合わせによる唐代傳奇小説の創作方法――「靈應傳」を例として」は、『學林』第七十三號（中國藝文研究會、二〇二一年）に公刊した論文である。安史の亂以降、人の流動が頻繁になったことにともない、奇談も全國へ廣く傳播した。ゆえに、一つの先行作品のストーリーだけ借用すると、語られたものが虚構のものだと、すぐに聽き手に意識されたため、「類話群」という小説の創作方法は流行らなくなった。その代わりに、いくつかの先行作品から要素を組み合わせるという創作方法で小説を作った。本章では、「靈應傳」を例として、この作品の中で先行作品を借用した要素にはいかなるものがあり、またその使用狀況を分析することを通して、先行作品の要素の組み合わせという晩唐から現れてきた傳奇小

説の創作方法を具體的に説明した。

第三章「唐代小説の中の詩の機能」は、二〇二二年七月三十一日の中國藝文研究會で口頭發表の原稿をもとにし、訂補したものである。本章では、細部描寫と見しうる詩をもって、唐代傳奇小説において細部描寫がいかに發展したかを考察した。詩は六朝志怪小説の中にあまり見られなかったが、唐代傳奇小説の中に多く現れた。本章では傳奇小説に限らず、すべての唐代小説の中の詩を對象として詩の小説中の機能を研究した。詩は唐代小説中にさまざまな機能を發揮した。これらの詩は小説のストーリーに介入する程度によって、五つの種類に分けることができる。それは、まったくストーリーに介入しない詩、ストーリーの一プロットにあたる詩、前後のプロットに關わる詩、ストーリーに重要な役割を果たす詩、ストーリーの主體になる詩である。時代が下るとともに、小説中に發揮する詩の機能が多くなり、ストーリーに介入する程度も深くなった。晩唐になると、「鄭德璘傳」のような詩とストーリーとが完璧に融合した物語が現れてきた。

唐代傳奇小説は中國の最初の眞の意味での小説だという説は、廣く研究者たちに承認されているが、唐代傳奇小説の作者はなぜ虚構をなし始めたか、作者による意識的虚構はどのように小説中に現されているかについては、あまり研究されていなかった。本論文では、從來の研究で看過された非獨創的な小説を用い、類話群での細部描寫の變化に着目し、唐代傳奇小説の作者たちが意識的虚構をなし始めた理由と小説における虚構の現し方について論じた。虚構・細部描寫・類話群の三者は結びついており、それゆえ、細部描寫から意識的虚構が現れたという現象を、唐代傳奇小説の創作方法の一つである類話群をもって證明できるのである。